



堀口大學全集

2

堀口大學全集 2

昭和五十六年十月二十日印刷
昭和五十六年十月三十日發行

著者 堀口大學

發行者 長谷川郁夫

發行所 小澤書店

東京都千代田區富士見三十五・十二
電話(東京)二六三一九二一八(代)

印刷 精興社

製本 大口製本

製函 日東工業

定價八五〇〇圓

凡例

一、本全集は、堀口大學の今日に至るまでの全業績を、詩、短歌、譯詩、評論、隨想、翻譯作品（小説・戯曲・評論・隨想）等の各分野に互って、原則として既刊の單行本を中心に編纂したものである。

*

一、本卷（第2卷）は、譯詩Iとし、著者の全翻譯詞華集を收録した。

一、本卷本文の内容は、既刊の單行翻譯詞華集四點（『月下の一群』、『空しき花束』、『青白赤』、『檳榔樹』）を基本とし、これ以外の詞華集については、上記詞華集と重複しない作品だけを纏めて「拾遺」に收録した。

一、本卷本文は、著者の近代詩史に於ける役割と業績を明確にする方針に則り、すべてそれぞれの單行本初版を底本として使用した。

一、本文の漢字・假名遣等は、原則として底本通り（本卷の場合はすべて正字舊假名遣）としたが、次のような場合には訂正した。

1 誤字・誤植と判断されたもの。

〔例〕 軌道↓軌道、囓る↓齧る、巢籠る↓巢籠る、蕨↓棘、脊後↓背後、等。

2 假名遣・ルビの誤り（但し、用ひる、及び音便に關する表記は、底本通りとした）。

〔例〕 言はふ↓言はう、酬ひる↓酬いる、しやう↓しよう、音↓音、餘韻↓餘韻、等。

3 脱字、或いは送り假名不足で不自然なもの。

〔例〕 未（だ）、逢（は）ず、働（か）ない、生（き）て、等。

4 著者の訛用と判断されたもの。

〔例〕 おしまへ↓おしまひ、渴いて↓渴えて、おさいて↓おさへて、マロニイ↓マロニエ、等。

5 前後が轉倒したもの（但し、難有は底本通りとした）。

〔例〕 全安↓安全、菫首↓苜蓿、香茴、↓茴香、龍土↓土龍、計時↓時計、等。

6 俗字（但し、同字と見做される場合は雙方を竝用した）。

イ 正字に改めたもの。

〔例〕 潤↓闊、耻↓恥、凜↓凜、鼓↓鼓、鬱↓鬱、涼↓涼、温↓温、鎖↓鎖、戯↓戯、憇↓憩、等。

ロ 雙方を竝用したもの。

〔例〕 竝〓並、唇〓唇、糸〓絲、痴〓癡、秘〓祕、双〓雙、廻〓迴、窓〓窗、窓。

一、次のような場合は底本通りとした。

1 底本刊行當時の一般的慣用と見做されるもので、誤字・誤植とは判断出来ない用法。

〔例〕 自働車、行衛、紀念、立琴、業蹟、フランソワ・ヴィロン、等。

2 著者独自の用法。

〔例〕 濡るしめ、凋れるしほ、等。

3 同語の異書體。

〔例〕 何所〓何處、此所〓此處、蘆〓葦、欲〓慾、麵麩〓麪包、彼方〓彼方むかふ、じつと〓ぢつと、等。

4 踊り字。

5 外來語表記（拗音・促音の大小も底本通りとした）。

一、底本の製版上不明確な行アキについては、初出、及び異本を検討した上で編輯委員の判断をもって決定した。
 二、脱字・脱行については、底本の誤植と判断されたもののみを訂正し、原稿作製時にすでにあったと判断されたものは訂正せず、本文の行の右側に〔註〕の記號を付し、校註に記した。

一、以下の處置により、本文と底本との間に異同を生じた場合は、すべて校異に摘記した。

一、卷末の解題には、使用した底本の書誌的な詳細を記し、異本、後版等についても記述した。また、『月下の一群』以前の詞華集については、その異文を「資料」として掲出した。

目次

譯詩 I

月下の一群

5

空しき花束

265

青白赤

431

檳榔樹

479

拾遺

533

昨日の花

535

失はれた寶玉

538

	月夜の園	544
	新編 月下の一群	545
	キュビドの籬	558
	フランス詩集	559
	海軟風	620
	作品細目	699
	校異・校註	735
解題		749

堀口大學全集
2

譯詩 I

月下の
一群

佐藤春夫におくる

序

最近十年間の私の譯詩の稿の中から、ほぼその一半に相當する佛蘭西近代の詩人六十六家の長短の作品三百四十篇を選んでこの集を作つた。

最初私はこの集を見本帖と云ふ表題で世に問ふつもりであつた。と云ふ理由は、たまたま此集が佛蘭西近代詩の好箇の見本帖であつたからである。即ち佛國に於ける近代詩の黎明とも云ふ可き、ポオドレエルから、ヴェルレーン、マラルメを経て近く大戦後の今日に到る最近半世紀の佛蘭西詩歌の大道に現れた詩人及びその作品を、私の詩眼で評價し選擇して作られたのがこ

の集である。

讀者の見らるるとほり、私がこの集の譯に用ひた日本語の文體には、或は文語體があり、或は口語體があり、硬軟新古、實にあらゆる格調がある。然しそのいづれの場合にあつても、私が希つたことは、常に原作のイリュージョンを最も適切に與へ、原作者の氣稟を最も直接に傳へ得る日本語を選びたいと云ふ一事であつた。

後世或は、語に明に詩に厚き、高雅な閑人があつて、原作と對比してこの集を讀んで呉れるかも知れぬ。彼の温情ある賞讃の微笑を、私は地下に感ずるであらうか？

千九百二十五年四月

堀口大學

蜂

ボオル・ヴァレレイ

褐色の蜂よ、汝が針

かくも鋭く、かくも毒あるも

わが胸の美しき花籠を

われは思ひのダンテルをもて被ひたるのみ。

その上に「戀」の來て死にまた眠る

美しき瓢に似たる乳房をば刺せよ、蜂、

かくて紅のわれをして、いささかは、

圓みある反きがちなる肉の面に滲ましめよ！

われは速なる苦痛を希ふ

あらはに激しき痛み

故知らぬ悩みよりは堪へやすし！

わが感覺よ、痛ましきこの金色の針により

汝目さめてあれ、これなくば

戀は死に、戀は眠らん！

風神

ボオル・ヴァレレイ

人は見ね 人こそ知らね

ありなしの

われは匂ひぞ

風がもて來し！

人は見ね 人こそ知らね

偶然かはたは鬼神か

來しと見しそのたまゆらに

業ははてつる！

わが詩は人讀まず

人知らず

博士も解かず